

はじめての

万葉集

日本に現存する
最古の和歌集「万葉集」を
わかりやすく紹介します

vol.
138

行幸先の真土山

本歌は、前の歌(五四番歌)の題詞によれば、既に文武天皇に天皇の位を譲っていた持統太上天皇が大宝元(七〇一)年九月に紀伊国(現在の和歌山県)に行幸した際に、詠まれたものです。題詞とは、歌の前に置かれ、歌の主題や歌が詠まれた事情や年月、歌を詠んだ人の情報などを記した漢文です。歌を詠んだ調首淡海は、天武元(六七二年、壬申の乱に舎人として天武天皇方につき、その功績から和銅二(七〇九)年に昇叙を受けた人物です。本歌を一読してまず気づくのは、第二句と第五句(結句)とに同じ語が用いられていることとでしょう。同様の例として、『万葉集』には「桜田へ鶴鳴き渡る年魚市潟潮干にけらし鶴鳴き渡る」(二七二番歌)などがあります。『古事記』や『日本書紀』にも同じ形式のものが見られることから、短歌の古い形式であろうと言われています。この時五十歳前後だったと思われる淡海にとって、なじみのある形式だった

あさもよし 紀人羨しも

亦打山 行き来と見らむ 紀人羨しも

調首 淡海 (巻一・五五番歌)

のでしょうか。

歌は、真土山をいつも見ることでできる紀伊国の人が羨ましいという気持ちを表明したものです。「あさもよし」は「紀人」にかかる枕詞で、紀伊国は麻の裳(古代の女性がまとったスカート状の着物)の特産地として著名であつたことからかかります。そのため、ここでは「麻の裳もよい紀の国の人」と訳しています。歌はそうした紀伊国の人に対して「羨し」、つまり「羨ましい」と述べているのですが、なぜ羨ましいのでしょうか。それが明かされるのが、第三・四句「亦打山行き来と見らむ」です。「亦打山(真土山)」は大和国(現在の奈良県)と紀伊国の国境、吉野川(紀ノ川)北岸にある低山です。紀伊国の人はその真土山を行ったり来たりして見るのだろう、と現在推量の助動詞「らむ」を用いて想像しています。つまり、「紀伊国の人には真土山をいつも眺めることができるのだろうなあ」と述べているのであり、歌はそのことについて羨ましさを表明しているのです。

真土山は大和から紀伊へ入る際に必ず通過

訳 麻の裳もよい紀の国の人

羨ましいことだ。真土山を歩き
帰りに見ているのだろう。紀の
国の人の羨ましいことよ。



する国境の山として、都の人にもよく知られた景勝地でした。行幸先の土地は言うまでもなく天皇の支配下にあります。したがって、その土地の人を詠み込み、現地の名所を讃めることは、その土地の支配者である天皇を讃美することに繋がります。本歌は、紀伊国の名所である真土山を讃めながら、そこを支配している天皇をも讃美した歌と言えるでしょう。

(本文 万葉文化館 榎戸 涉吾)

万葉文化館 イベント情報

◆特別展「NEW PAST

飛鳥・藤原から東アジアへの旅

開催中(11月18日)

写真家・石川直樹さんが『万葉集』ゆかりの地を撮影した写真作品を展示します。「東アジア」とのつながりの中で揺れ動いていた「飛鳥・藤原」が浮かび上がる展覧会です。

※国内の小・中学生、高校生、18歳未満の人は無料。その他割引など、詳しくは当館HPをご覧ください。



しまなみ海道



慶州

●石川直樹トークイベント 無料・要申込

1月10日(土) 14時~16時(開場13時30分)

1部「石川直樹トークショー」

2部「トークセッション」

「登壇者」石川直樹さん(写真家)

山田隆文(県世界遺産室調整員)

井上さやか(当館企画・研究係員)

「会場」企画展示室

「定員」150人(先着)

●学芸員によるギャラリートーク

申込不要・要観覧券

11月19日(水) 15時40分~

「講師」当館学芸員

「会場」日本画展示室

◆万葉集をよむ 無料

11月19日(水) 14時~15時30分

「秋の相聞(1)」

(巻8:1606~1623番歌)

「講師」中本和当館主任研究員

「定員」150人(先着申込不要)

※オンライン視聴は要申込(定員なし)

◆にぎわいフェスタ万葉秋

開催中(11月24日振替)

※詳しくは当館HPをご覧ください。



奈良県立 万葉文化館
☎0744-54-1850
🌐www.manyo.jp

申し込み
はこちら

